

# ピアノ初心者に対する有効的な簡易伴奏法についての一考察 —— 和音記号学習とコードネーム学習の比較から ——

田中 麻貴

## はじめに

幼児教育の現場において、保育者のピアノ演奏の技術は欠くことができないものである。それは採用試験でピアノ実技の試験を課している自治体が多いことから分かる。保育者はこどもの音楽表現活動における様々な場面でピアノを演奏することになるが、それらは常にこどもに寄り添いながら行われるものである。とりわけ「弾き歌い」に関しては、ピアノ演奏をしながら歌をうたい、さらに、こどもたちにも目を向けなければならない、高度な技術が必要といえる。しかしながら、他大学の報告でもなされているが、養成校に入学してくる学生の中にはピアノ未経験者であることも少なくない。こうした学生が、人前で自信をもってピアノ演奏ができるようになるまでには、かなりの時間と地道な努力が必要であることは言うまでもないが、それに割ける十分な時間がないのもまた事実である。初心者はなかなか技術が向上しないことで意欲が低下し、ピアノ演奏に対して苦手意識を持ってしまいがちである。そのため練習嫌いになり、ますます技術が伸びないという悪循環に陥ってしまう。このような現状を踏まえると、初心者でも実践可能な簡易伴奏法の修得は、学習者が意欲を持って練習に取り組む上で効果的であるといえよう。そこで本研究では、本学科で指導している2種類の簡易伴奏法の実践内容について報告し、その有効性について考察することを目的とする。

## 1. ピアノ初心者の実態

本学科では、入学時にピアノを習ったことがあるかどうかの経験調査を行っている。在学生の調査結果を示すと、平成26年度入学生は52%、平成27年度入学生は38%、平成28年度入学生は41%、平成29年度入学生は78%が未経験者という結果であった。また経験者であっても、こどもの頃に数年習っていたが辞めて10年以上のブランクがあるという学生や、入学前の数か月間習った程度で

あるという学生も多く、それらの人数も併せると初心者レベルの学生はかなりの数に上る。こうした初心者レベルの学生には、ト音記号で書かれた音符を読むことはできて、ヘ音記号で書かれた音符は読めないといった傾向が多く見られる。したがって、伴奏の楽譜で用いられるト音譜表とヘ音譜表が混在する楽譜を読む際にヘ音譜表で躓き、読譜に対する苦手意識が生じている。それが基でピアノ練習に対する意欲が湧かないという学生は少なくない。

## 2. 簡易伴奏に関する学習内容

本学科では楽典の学びを基軸においた「音楽理論」の授業を1年生前期に必修科目として開講している。その内容は、読譜のために必要な音高やリズムは勿論のこと、ピアノの簡易伴奏を考える際に必要となる音階の仕組みやコード進行に関する知識までを教授するようにし、その後続く「ピアノ演習」授業で簡易伴奏の実践へと広げている。ここでは、本学科で指導している2種類の簡易伴奏法について提示する。

歌の伴奏形は、ピアノで歌の旋律を演奏せず両手で伴奏を行う方法と、右手で歌の旋律を演奏し左手で伴奏を行う方法の2種類に分けることができる。前者の伴奏形は、左手のみで伴奏を行う時とは違い、広範囲の音域を使用した伴奏が可能となる。また、片手演奏では難しい複雑なリズムの伴奏が行え、歌の雰囲気をもより盛り上げてくれる伴奏形であるといえるだろう。しかしながら、この両手伴奏では旋律を弾きながら歌うことができないため、正しい音程で歌うことが難しくなる。とりわけ初心者は、旋律を演奏しなければ自信を持って歌えず、声が小さくなってしまいう傾向にある。そのため、本学科では左手による伴奏法で指導を行っている。

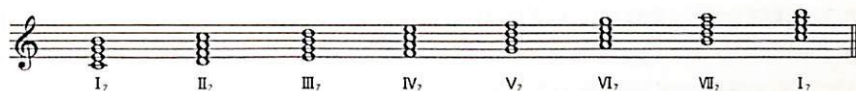
### ①和音記号を活用した和音による伴奏

和音記号は、音階の第1音から第7音までの音を根音として、その根音から3度上ずつ2つの音を積み重ねて構成する三和音を順番にⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶとローマ数字で示し、それぞれをⅠ度の和音、Ⅱ度の和音といったように呼称されるものである(譜例1)。和音記号は各調の音階上に構成される三和音を全て同一のローマ数字で表記することとなるため、○調の○度の和音といった調性と密接な関わりをもつ。



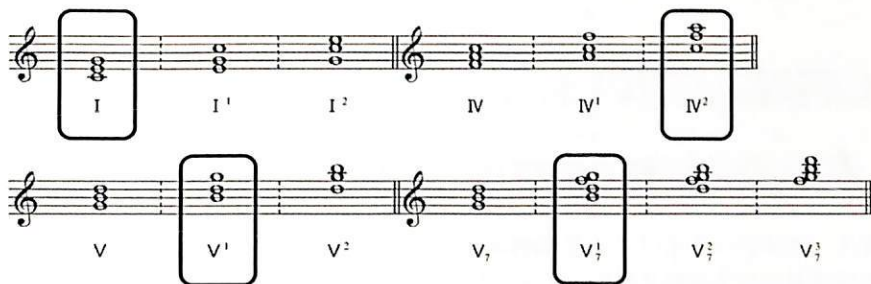
譜例1：八長調の音階上に構成された三和音の和音記号

譜例1のI度の和音からVII度の和音の内、最も重要な働きをもつ和音は、主要三和音と呼ばれるI度の和音とIV度の和音、V度の和音であり、簡易伴奏法で用いられる基本的な和音である。また、三和音にさらに3度上の音を積み重ねた4個の構成音からなる和音を七の和音と呼ぶが、その内、属音上に構成され、最も頻繁に用いられる和音が属七の和音(V<sub>7</sub>)である(譜例2)。簡易伴奏のための和音付けでは、主要三和音と属七の和音を用いて指導を行う。

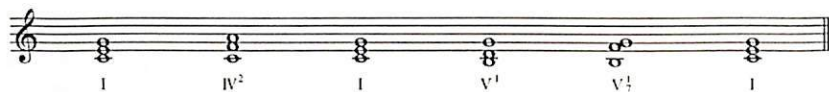


譜例2：八長調音階上に構成された四和音の和音記号

簡易伴奏の際には、左手の動きをできるだけ単純化することが重要となるため、和音は譜例1で示したような基本形のまま用いるのではなく、IV度の和音については第2転回形を用い、V度の和音については第1転回形を、属七の和音(V<sub>7</sub>)については第1転回形でかつレの音を省いた形(譜例3)を用いるこ



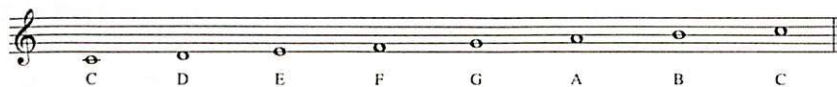
譜例3：八長調I・IV・V・V<sub>7</sub>の転回形

譜例4：I - IV - I - V - V<sub>7</sub> - I

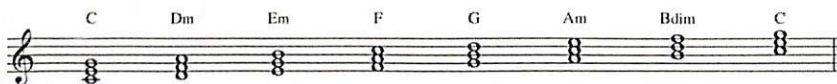
とし、それをI - IV - I - V - V<sub>7</sub> - Iという和音進行（譜例4）の流れで和音を弾く練習を繰り返すよう指導する。この練習により和音を音としてだけでなく手の形で覚えることを意識させる。

## ②コードネームを活用した単音による伴奏

コードネームは、ジャズやポピュラー音楽で用いられる和音の略記法で、楽曲の調性と関係なく1つ1つの和音名（コードネーム）を旋律の上に書いて和声進行を示すものである。コードネームは英語音名（譜例5）を基としており、大文字のアルファベットが和音の根音を示し、#やbといった変化記号が付く音であることを示す際には、C<sup>#</sup>やC<sup>b</sup>と表記する。小文字のアルファベットは和音の種類を示しており、大文字のアルファベットだけが表記されている和音はメジャーコード（長三和音）、大文字のアルファベットに小文字のmが付加されている和音はマイナーコード（短三和音）、dimが付加されている和音はディミニッシュコード（減三和音）であることが、コードネームだけで判断することができる（譜例6）。セブンスコード（七の和音）は大文字のアルファベットの横に数字の7を付加して示し、その他の和音の種類も全てコードネームで書き表されるため、即座に音を思い浮かべることが可能な表記法である。



譜例5：英語音名



譜例6：コードネーム

しかしながら、C（ド・ミ・ソ）、Cm（ド・ミ<sup>b</sup>・ソ）、C<sub>7</sub>（ド・ミ・ソ・シ

b) といったように、和音の種類に合わせて根音以外の音で変化記号を付ける音を考えなければならないため、瞬時に判断して弾くためには習熟が必要であるといえる。そこで、大文字のアルファベットが示す根音の音のみを演奏する方法を簡易伴奏法として指導する。

### 3. 2種類の伴奏法の比較

これまでに和音記号とコードネームを用いた簡易伴奏法についてまとめたが、ここではこの2種類の伴奏法を学生に実践してもらった結果を基に、それぞれの有効性について考察していく。

前項の①で示した和音記号は必ずある調と結び付いているため、単にI度の和音といっても、何の音であるのか分からない。つまり、コードネームが固定ド唱法的な考え方であるとするならば、和音記号は移動ド唱法的な考え方となる。そのため、和音記号を理解するためには、楽曲が何調で作られたものであるのかを判定する必要がある。調判定は曲の終わりの音や調号を確認して判断することとなるが、この調判定の方法も繰り返しの中で身に付けられるよう、レッスンを始める前に必ず回答してもらうことを習慣化している。そのため、調判定が正解すれば、その調の主要三和音と属七の和音はスムーズに弾くことができ、旋律の下に和音記号を示せば、読譜を苦手とする学生も容易に左手の伴奏が行えている。和音記号による簡易伴奏法は、#やbが付くことによって多少の違いは起こるとはいえ、いかなる調においても左手の形が同様になるため、移調演奏にも対応できるという点が優れている。実際、簡単な楽曲であれば、初心者学生も容易に移調演奏を行えていることが確認できている。また、最初は和音による伴奏で練習を行い、慣れてくれば譜例7のように様々な伴奏形へとアレンジさせて、左手の技術をステップアップすることが可能である。



譜例7：I度の和音による伴奏アレンジ例

このように簡易伴奏に和音記号を用いることは優れているといえるが、主要三和音と属七の和音だけを用いた和音付けで全ての楽曲に対応するには無理な場合もある。例えば、II度の和音やVI度の和音といった副三和音が用いられた

楽曲の際には、主要三和音と属七の和音だけで和音付けを行えば不協和音程が生じてしまう。また、曲の途中で他の調の和音が一時的用いられるような和声進行が展開された楽曲の場合は、借用和音が用いられているということを解説する必要がある。こういった点においては、コードネームで示された根音のみを弾いていく簡易伴奏法であれば、いかなる和声進行が繰り返されたとしても響きの濁りが生じることはなく、万能性があるといえる。しかしながら、学生はこの簡易伴奏法をあまり好まない傾向にある。コードネームで示された根音のみを演奏するということは、和音を弾く際と比べて左手で押さえなければならぬ鍵盤数は明らかに減るため容易になると考えるが、学生は左手の動きに戸惑ってしまうようである。和音記号の際には手の形で覚え、鍵盤を確認しなくても弾くことができたが、コードネームでの場合は、示された音を探すために若干の時間を要すると共に、ミスタッチが多くなるという問題が確認できた。また、このコードネームで示された根音のみを弾いていく簡易伴奏法の欠点は、伴奏形のアレンジが譜例8のように、同音によるリズムの変化でしか行えないことである。



譜例8：根音のみによる伴奏アレンジ例

この点を改善する方法としては、根音のみを弾いていく単音による伴奏法から、根音と第5音の和音による伴奏法へと変えることで、少しは改善が図れるであろう。この方法を用いれば、C（ド・ミ・ソ）、Cm（ド・ミ♭・ソ）、C<sub>7</sub>（ド・ミ・ソ・シ♭）と、メジャーコードにもマイナーコードにもセブンスコードにも共通して含まれる音を抽出して弾くことになるため、根音以外の音で変化記号を付ける音について考えなくてもスムーズに弾くことが可能である。この根音と第5音の和音を譜例9のように交互に弾いていくことで、同音によるリズムの変化よりは音楽的になるであろう。



譜例9：根音と第5音による伴奏アレンジ例

しかしながら、コードネームは基本的に転回形については自ら考えないといけない。したがって、その余裕がなければ和音の基本形で動いてしまい、左手の動きを単純化することができなくなってしまふであろう。以上の考察から、2種類の簡易伴奏法の有効性と問題点が明らかとなった。

#### 4. 今後の展開

多様な楽曲に対応できる簡易伴奏の方法としては、現在、指導しているこの2種類の簡易伴奏法を織り交ぜて活用する必要があると考える。基本的には、主要三和音と属七の和音を用いた和音による伴奏法を用い、副三和音や借用和音への対応は、コードネームを活用して根音のみを弾くことで不協和音程が生じることを防ぐという方法である。この方法に慣れるためには、譜例10のように調性に関係ないコードネームの表記に対し、調性と密接な関係を持つ和音記号の表記を重ね合わせて理解を促す必要がある。



譜例10：和音記号とコードネーム

借用和音が何調に属するものであるかという解説には課題があるものの、コードネームに従って弾けば不協和音程の問題は生じることがない。今後はこの方法での有効性について検証していきたい。

#### おわりに

作曲者の意図通りに演奏するという観点から考えると、本来、簡易伴奏自体望ましいことではないであろう。しかしながら、ピアノ経験者であっても原譜通りの伴奏で弾き歌いをするには困難をきたす場合がある。したがって、初心者に対して原譜通りの演奏を要求することは、かなりハードルの高いものである。また、弾き歌いは歌唱がメインであるため、ピアノ演奏にばかり集中し、声がほとんど出ていない状態や中断しながらでなければピアノ演奏ができないといった状態では問題である。その上、原譜通りの演奏にこだわって、

ただ音を奏でるだけで必死になり、音楽性に欠けてしまうような歌い方や演奏になるのも望ましいことではないため、簡易伴奏で弾き歌いすることはやむを得ない手段であると考える。

最近の学生は、結果をすぐに求め、短期間で成果が上がらなければ「ピアノは嫌い」と投げやりな気持ちになり、根気よくひたすらに練習に取り組む姿勢を持つことが難しい傾向にある。こういった学生の練習意欲を引き出すためには、仮に簡易伴奏であっても「弾けた」という達成感を味わう経験を繰り返しもたせるような指導が大切であると考え。事実、レパートリー曲が増え、自分自身で技術の上達が実感できるようになった学生は、練習することの楽しさに目覚める。そうした学生の中には、未経験者で入学してきたことが思い出せなくなる程に上達することがある。昨今は簡易伴奏による楽譜が数多く出版されているため、ピアノ初心者のレベルに見合うような楽譜を手にすることができ。しかしながら、学生にはそうした楽譜を入手したとしても、それを基にアレンジを加えることができるような応用力を身に付けてもらいたいと考える。

#### 参考文献

1. 教芸音楽研究グループ編：『改訂音楽通論』教育芸術社、2009
2. 平井李枝：教員養成課程学生に対するピアノ「弾き歌い」指導法の研究、『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第2号、2016
3. 早川純子、櫻井琴音：小学校音楽科歌唱共通教材の簡易伴奏法—7音階および5音階に基づく楽曲のコードネームと和音記号による和音奏の比較、『南九州大学人間発達研究』第7号、35-45、2017